

# 会計史という世界を歩く

三光寺 由実子

会計史研究の中で、私が最初に研究対象としたのは、「テンプル騎士団の会計史」である。テンプル騎士団とは12・13世紀において、パリを拠点にヨーロッパ・近東にまで、幅広く金融業務を行った宗教集団を指す。映画『ダ・ヴィンチ・コード』に登場していたことを思い出す読者もいるかもしれない。彼らは、以下の三点において同時期の他の騎士団より傑出していた。第一に、宗教集団の中で、唯一軍事目的で創設されており、華々しい戦果をあげた点、第

## テンプル騎士団の会計史

二に、フランス国王や高位聖職者の支持を得て、ヨーロッパ全域で人気・評価を博した点、第三に、莫大な土地・財産の寄進を受け、また銀行業務を広く営業して、巨万の富を蓄積した点である。そして幸いな事に1295年3月19日から1296年の7月4日までのいわば「現金日記帳」とでも呼ぶべき、テンプル騎士団が行った業務のうち、現金収支に係る金額を記録・把握するための帳簿のコピーを入手することができた。

では、残存史料の有無にかかわらず、数ある会計史のテーマの中で、なぜ筆者は中世フランスのテンプル騎士団の会計帳簿を選んだのか。それは、テンプル騎士団は、「複式簿記」を行っていたのではないかという推測があったためである。

今日、社会において広く普及する簿記の一つが「複式簿記」である。複式簿記とは何か、だけで学会テーマとして成り立ってしまうものなのだが、ここでは「一つの取引を二つの側面から見ていること（例えば現金での商品仕入れであれば、商品は増えるが、現金は減る、のよう）に複式記入であること」が大きな特徴であることのみを述べておきたい。

複式簿記がいつ頃、世界で誕生したのか、という複式簿記起源論争の中でも「中世イタリア起源説」は、一つの有力な説である。すなわち、著しい経済的発展を遂げた中世イタ

リアの地で、商人たちが各自取引を記録する中で生成したとするものである。そのため、中世イタリア会計史研究は中世会計史の中でも比較的多い。かたや、隣接するフランスについては、私が大学院生であった約20年前には、イタリア程に活発に会計史の議論がされていなかった。それゆえ、テンプル騎士団の会計帳簿は、未開拓なフランス会計史を紐解く格好の材料だった。テンプル騎士団の「現金日記帳」のコピーを傍らに置き、私は（これが複式簿記なら、会計史の歴史を刻む論文になる）と意気込み、ひたすら机に向かった。しかしながら、2年の研究の末、わかったのは、テンプル騎士団の簿記は複式簿記ではなかったということであった。

ただし、だからといって彼らの簿記に新しい発見事項がなかったわけではない。テンプル騎士団は、フランス国王というとんでもない大口顧客をはじめ、さまざまな顧客を抱えていたわけであるが、顧客・業務別に会計帳簿を作成し、複雑な金融業務を巧みに振り分けていた。そこには複式簿記の必要性が、特段なかったのかもしれない。

複式簿記の歴史を辿るのだけが、会計史ではない。いや、複式簿記ではない簿記の歴史の世界があるのではないか―それが、修士論文で出した結論であった。

（和歌山大学経済学部 准教授 博士（経営学）

わだ い  
浪 切  
サ ロ ン

第127回

# 災害から、命、地域を守るために

の興ぶ  
まで復学  
これら  
復か

- 話題提供者 **宮定 章** (和歌山大学 紀伊半島価値共創基幹 災害科学レジリエンス共創センター特任准教授)
- 日 時 **6月16日 水 19:00 ~ 20:30**
- オンライン講演会 / 参加無料 / 申込必要 / 100名限定
- 申込は右記QRコードからご登録ください。\*申込は15日|火|17時まで
- 問合せ先 和歌山大学岸和田サテライト TEL・FAX 072-433-0875



申込はこちらから